

討 論

討 論

荒木 どうもありがとうございます。残り時間があまりありませんが、1人2、3分の持ち時間でご意見やコメントを、話題提供者の先生方からいただけたらありがたいかと思います。藤川先生から順にお願いします。

藤川 今日は、本当に私などの経験を聞いていただいてありがとうございます。ほんの数年前、発達障害の人とその非行とか犯罪を結びつけるなどということすごく、私などのしゃべることは偏見を促すとか、差別を助長するというふうに受けとめられるような空気があったんですけども、実際、次から次へこの人たちの生きづらさ、それが時として犯罪・非行という形をとることがあるという理解が進む中で、ようやく私が本当に言いたかったことというのをこんな機会をいただいてお伝えできるようになりました。すごくうれしく思っています。

受容と共感が失敗するというのは非常にきつい言葉なんですけど、本当の受容と共感というのは、彼らの発達の凸凹をちゃんと知って、それに合った対応をするということが本当の意味の「受容」であると思っているんですね。ですから、受容と共感スキルがまずいという言いの方が分かりやすいかも知れませんね。

さて、性の問題ですが、性犯罪にはずっと取り組んできたので、発達障害者の性加害のケースなどを紹介すべきだったのかもしれないんですが、とても難しいです。これでもか、というほどに支援をしても、繰り返されるケースがあります、少数ですが。児童相談所がかかわり、児童自立支援施設にも行き、だけれどもまだ繰り返すという子がいるんですね。一番小さいときに、これは親の愛情不足だと言われて、プレイセラピーも受け、あんたはいい子よ、いい子よというふうに自尊感情とやらを大事にされて、それでなおかつ繰り返すというふうな、そういう事例を幾つか、経験してきました。また放火の累犯など、最困難犯罪に対応していると、初発時の問題行動に対応するやり方がどうであるべきだったのか、私自身

も考え込むばかりです。今日は、こういったことにも耳を傾けていただけて、本当にありがとうございました。

小谷 私も「やみくもに診断するな」という言葉がぐさぐさと胸に刺さりつつ、それでもやっぱりという思いを持ちながら早期診断に携わっています。

3点について述べたいと思います。

第1点目は、早期診断といっても、この領域の診断は何年もかかることもあります。それから、診断名が変わることもあります。ですので、私自身は、診断の見直しということをはかっているつもりでもあります。

それから2点目ですけれども、親御さんに発達の凸凹ということがおありになるときに相互理解は非常に困難になることがあって、時々、私、マリッジカウンセラーみたいになって、だんなさんがおうちに帰ってきて、物がちゃんと整ってるかチェックするのは、それはもしかしたら、お子さんとちょっと似通った特性であるかもしれないねと。あの人ったらというふうに思われるような不和にならないように、親御さんを仲よしにするために、お二人の行動を解釈していただく一つのツールに発達凸凹を使っています。

それから、3点目ですけれども、先ほどの診断と告知ということで非常に難しいんですけれども、やはり私自身が何例か非常に痛い目に遭っていて、例えば大学生で、人とかかわる実習に出ることがあるんですね。そういうときに、本人は非常に有能感があってできると言い張るんですけれども、施設の受け入れ側の方々がやっぱり困るというふうにおっしゃることがあって、その間に挟まって非常に支援困難を極めたことがあって、本人と何度も面談を重ねて、そこには無診断、正しい自己理解ができていないというところにやっぱり行き着くんですね。だから、自己像、それから理解者とともに気持ちよく人生を生きていただくために、やはりどこかの時点で、診断という言葉がいいのかどうかわかりませんが、診断を自己理解につなげていきたいというふうに考えています。ありがとうございました。

楠 子ども集団づくりの実践報告を読みながら感じていることとして、虐待状況に置かれていて、その中でめちゃくちゃ荒れていた子どもたちとつき合ってきた先生というのは、基本的に発達障害の子どもともうまくかわれるということを非常に感じています。表面的な問題行動に囚われるんじゃないくて、その背後のその子の思い、あるいは「わけ」を読み取っていきえるんです。ある学級では、班長会が、「わけがある」と書いたポスターを張ってるんですね。だから、問題行動のところじゃなくて、その背後の「わけ」を考えようというスタンスを学級全体としてつくっているわけです。

また、ある実践では、中学2年生の男子生徒（アスペルガー障害と診断されている）が、鬼ごっこをしていて友達に抱きついて「変態！」と言われて、変態と言った子に殴りかかったんだったら話は簡単なんだけど、そうじゃなくて、10メートルぐらい離れた子どもものところに行って、その子に殴りかかったんですよ。この生徒、今までは「わけのわからんときにキレるやつ」とずっと思われていたんだけど、先生は「わけわからんとキレる」ことはあり得ないと考えて、結局、「その変態という言葉聞いたときに、そう言った子とは仲がいいんですね。だから腹は立てていない。でも、変態という言葉聞いた瞬間に、変態、変態と言われていじめられていた体験がフラッシュバックしてきて、10メートルぐらい離れた子どもものところに行って、殴りかかりに行った」ことを聴き取っていくんです。これまではこの生徒がキレるワケをだれも読み取らなかったのに、初めてその先生が読み取ったんです。そして、「そうか、変態という言葉聞いたときに、前、変態と言われていじめられてたときの傷つきがよみがえってきてしまって、それで殴りに行ってしまったわけね」というように返した。問題行動を容認しないけど、少なくともその背後の「わけ」を読み取られたときに初めて彼は「ごめんなさい」って謝れたんです。今まで一度も自分の思いを読み取られたことがなかった、だから、彼は謝れなかったし、「わけわからんとキレるやつ」と思われていたんです。それが初めてその「わけ」を読み取られ、受け入れられているという感覚を持てたとき、彼は謝るという行為ができたのですが、こういうことってよくあり

ます。

だから、別に広汎性発達障害の「タイムスリップ」ということを知らなくても、問題行動の背後にあるその子どもの思いを読み取っていく姿勢を持っている先生にはそれができる。

ただ、そのような実践を展開していけるだけの学校現場のゆとりが本当になくて、表面的な問題行動に対する叱責が繰り返されている。どういう状況の中でその子がそうってしまったのかを読み取るゆとりを本当に奪われていて、そのことがつらいというか、一番困難な点として感じています。

あともう一つ感じるのが、今の学校現場には特別なニーズをもつ子どもの個別支援にエネルギーを使うゆとりがないということです。ただ、それがユニバーサルデザインという形でわかりやすい授業をつくっていくこと、ほかの子どもたちにとってもわかりやすい授業なんだなというか、別にその子のためだけじゃなくて、すべての子どもたちがわかりやすい授業づくりにこれは使えるよねって形で一般化していけることが重要だと思います。

あるいは、発達障害の子どものviewを理解するというだけでなく、すべての子どもたちが自分の生きづらさや思いをこのクラスの中では表現しても安全なんだという、安全感の見通しをすべての子どもたちが持てる、そういう取り組みを進めていくことなしには、やはりその発達障害を持ってる子どもたちが、学級の中で安全感と見通しを持って居場所をつくっていく取り組みは困難だということです。やはり普遍的な取り組みとのつながりの中で、特別なニーズを持つ子どもへの理解と指導を進めていく必要があるということを日々感じています。

田井 私は、医師ではないので診断ということはしないわけですが、ノンラベルに相談に来られる方の8割、9割は未診断で来られます。親御さんが本とかを読んで、うちこうじゃないでしょうかという形で来られるので、判断という形でお伝えをするわけです。さっき小谷先生がおっしゃ

ってましたけど、何でも診断というふうに、ノンラベルと行ったら何でも発達みたいと言われる雰囲気はあるなと思うんですけど、さっきも紹介してた本に、人類すべての発達に偏りがあるというのは当たり前のことなんだと、そのことを書かせてもらって、診断とか判断というのは、決して障害だとかどうということラベリングするためにつけてるのではなくて、多くの人が多い立場でその人一人を支えたり、サポートしていく、その共通見解というか、方向性を持つために私は絶対必要というふうに思っています。

ただ、その告知の仕方というのは、やっぱり十分慎重にさせていただきたいと思いますし、親御さんがPDD場合には、親御さんに対しては、今さら診断を受けていただくとか、医療受診が必要とか、お薬が必要じゃないレベルで来られますから、それでも知っておかれないと、お父さん、お母さんが来られて、どちらがその本人さんへのサポートされるキーパーソンになるのかというのをこちらが見きわめて、それとなくお伝えするというのは支援を進めていく上でとても大事なんです。発達の偏りを持たれたお母さんが来られると、本当に遅々として支援が進まなくて、「お父さんは土曜日だったら面談に来ていただけますかね」とか何げに振りまして、お父さんに来ていただいて、幸いにもお父さんが定型範疇となると、とつとつと物事が解決していってしまうという体験もたくさん積んできています。

ただ、そのときにやっぱり今までに失敗がないかということ、今は本当にお一人気になってる方がおられて、ずっとお母さんがそうだというのを私が気づけなくて、今のところ、日本中で一番たくさん発達障害の方とかその親御さんと会ってると豪語して、すれ違っただけでもふっとわかるという状態になってきてるんだと冗談を言ったりするのですが、結婚されて、子育てもされてという年代の女性は、なかなかやっぱり判断ができなくてむずかしいんです。というのは、愛想笑いをしてくださるし、うなずきをしてくださるし、そうですよねとかいうのもちゃんと返してくださる。だから、何となく、大丈夫かってなってるのですけれども、なぜか例会で

学ばれたり、面談でお伝えしたことがおうちで実践される時には違う結果しか出ていないというのが続き始める、あれっと思うというレベルの方がおられることも経験してきました。そういう方に、お母さんもひょっとすると、本人さんと同じ文化持つてはるかもしれませんというような言い方をしたときに、やっぱり、私が障害なんですかというふうに受け取られる親御さんは今後も出てくるだろうと思います。今、私には障害があるのですか、じゃあ、もう夫に動いてもらいますと言って、お母さんが直接来られなくなったというケースをかかえているんですけども、やっぱりそういうことをお伝えするのは非常にデリケートな問題ですし、言葉を選び、タイミングを待ち、慎重に伝えていきたい。ただ、でも、伝えないで済む方もおられますけれども、本当はあることをないことにしては絶対問題は解決していかないし、進まないと私は思っています。その伝え方というのは非常に気をつけて今後も活動が続けていきたいというふうに思っています。ありがとうございました。

荒木 どうもありがとうございました。もうほとんど時間がなくなってきて、フロア討論にまわす時間がなくなってきました。ぜひ今日のシンポジウムで話し合われたことをそれぞれの現場や家庭に持ち帰っていただいて話し合いのきっかけにいただければさいわいです。

今日は朝から1日ごくろうさまでした。ありがとうございました。